

授業の失敗から学ぶ

～2018公開研究会「おにたのぼうし」の実践を通して～

小野澤 由美子

- I はじめに
- II 研究の目的
- III 「おにたのぼうし」教材研究
- IV 実践の実際
- V 授業のつまずきを探る
- VI 再設計
- VII むすび

I はじめに

2018年2月23日の公開研究会2日目の国語の授業後、不本意な授業をしてしまったことに大きく落ち込んだ。3年の物語文「おにたのぼうし」（三省堂）の教材研究が不十分であったこと、指導計画があやふやであったことが原因で、授業の中で、子どもとともに学びをつくっていくことができなかったからだ。当日の授業を全くふり返ることができなくなった。その授業に向き合うことができなかった。

ところが、ふり返らざる時が来た。「てつがくする教師部会」では、夏の校内研究会で部員5人が一人ずつラウンドテーブルの提案者になり、思いのたけを語らなくてはならないことになった。抱えている悩みなど、とにかく本音を語る。どんなテーマで話したらいいのかを話し合っていた時、「失敗した事例も話題提供になるね。」と言われ、公開研での失敗授業のことを話すと、「授業のビデオを見て、プロトコルを資料として提案したらどうだろう。」という意見が出された。部会の中で、自分が失敗したことを聴いてもらい、授業をふり返る勇気をもらい、後悔の原因を突き止めることになった。さらに、そのラウンドテーブルでは、グループのメンバーの一人に、「自分の教えたいことがあって、そこにいかなかったから後悔しているのではないだろうか。」と指摘された。正解を求めるつもりは全くなかったのに、子どもを強引に導くような授業になっていたのだろうか…。「教師から子どもへ一方的に伝達する授業」から抜け出て、「子どもとともにつくる学習」をしてきたつもりだったのに、そうではなかったのだろうか…

公開研究会の授業をふり返り、日々の授業、ひいては教育観をもう一度問い直してみることになった。

授業者は、S児の発言から、前回確かめたはずのおにたの気持ちが読みとれていないのを知り、ちゃんとそこは押さえたよねえ、という気持ちで、「はずかしがりや」という言葉ににこだわり続け、子どもを追いこんでいる。参会の先生方に対して、前時でちゃんとおにたの気持ちを押さえたんですよ、とアピールしたかっただけだったのかもしれない…。

☆子どものことばを受け止めて、そこから学び（読み取り）をつくっていくことを心がけてやってきたはずなのに、一番してはいけない、強引に授業者の考えにひっぱってしまった。『こっそり』という言葉からわかる人柄は、『はずかしがりや』だけなのかなあ。」と問い返せばよかった…。

(20180723校内研ラウンドテーブルの資料より)

II 研究の目的

澤本和子氏は、「国語科授業研究の展開 教師と子どもの協同的授業リフレクション研究」の「はじめに」でこう述べている。「教科書や教師用指導書を暗黙的に信頼していたのかもしれない。けれども、この研究を通じて次の結論に達した。授業はしてみないとわからないところがある。子どもがどのような読みをするのかは、まさに授業のその場で、子どもと教師、子ども同士が学習材・教材と取り組み、一部の妥協も排して研究し合うところから、発見や創造と出会えることがある。教科書教材はそれなりに吟味され、洗練されたものであり、筆者も尊重しているが、学習者との生きた対話、『協同的探究』という取り組みを通じて得るものは、世の中の権威を超える意味を持つと了解した。」

授業デザインは、目の前の子どもの実態を踏まえた上で、教師の願い、教材研究、単元計画を考え併せてつくっていく。今回の授業は、教師のこだわりが強くて、子ども不在の授業になっていなかったか。本稿では、公開研の授業のその場で何が起こり、授業者は何に戸惑ってしまったのかを、プロトコルを起こし、それを分析し、授業をふり返る。文学教材「おにたのぼうし」をもう一度読み直し、子どもの発言、子どもの記述を元に展開させる授業を構想し、この教材の授業デザインを作り直す。さらに、「ともにつくることばの学習」をどうとらえたらいいのかを問い直す。

Ⅲ 「おにたのぼうし」教材研究

1 文章構成

	場面	内容	心に留めたい表現 おにた	女の子
起	第1場面 (はじめ~P206L8)	節分の日に、まこと君の物置小屋から出ていく黒おにの子おにた	気のいいおに はずかしがりや、用心深い 「人間っておかしいな。おには悪いって決めているんだから。おににも、いろいろあるのにな。」	
承	第2場面 (P206L9~P208L2)	いい家を探し、トタン屋根の家にそろりに入ったおにた	おにたのひくい鼻がうごめきました。(こりゃあ、豆のにおいがしないぞ。しめた。ひいらぎもかざっていない。)	でこぼこした洗面器に雪をすくって入れました。
	第3場面 (P208L3~P210L9)	母親を心配し看病する女の子を見て飛び出したおにた	この女の子ならおににもいろいろあるのにな、という思いをわかってくれるのではないかな(期待)。 おにたは、もうむちゅうで、台所のまどのやぶれた所から、寒い外へとび出していきました。	お母さんに心配かけないようにしたい。
転	第4場面 (P210L10~P212L5)	女の子にごちそうを持ってきたおにた	母親思いの女の子におにたは何か役に立ちたいと思う。 入り口をトントンとたたく音がします。雪まみれの麦わらぼうしを深くかぶった男の子が立っていました。	お母さんに話した通りになってびっくり ごちそうはうれしい。
	第5場面 (P212L6~P214L5)	女の子に、やさしさをわかってもらえず急にいなくなったおにた 「…あとにはあの麦わらぼうしだけがぼつんとこのっています。」	おにたは、手をだらんと下げて、ふるふるっと、悲しそうに身ぶるいして言いました。 「おにだっているいろいろあるのに。おにだって・・・」	「あたしも、豆まき、したいなあ」 「へんねえ。」 「まあ、黒い豆!まだあったかい……。」
結	第6場面 (P214L6~終わり)	お母さんの病気が治ることを願いながらおにたが残した豆で豆まきをする女の子		(さっきの子は、きっと神様だわ。そうよ、神様よ……。)

主人公のおにたは、まこと君の家でまこと君家族の役に立つことをしながらも、だれにもわからないように、物置小屋の天井にひっそり住んでいた。しかし、節分の夜、まこと君が豆まきを始め、物置小屋にも豆をまき、おにたは古い麦わらぼうしをかぶり、カサッとも音を立てないで、物置小屋を出ていく。「人間っておかしいな。おには悪いと決めているんだから」と思いながら、こな雪の降る中、いいうちはないかと探しながら歩いていると、豆のにおいもしない、ひいらぎも飾っていないトタン屋根の家を見つけた。その家の女の子は病気のお母さんを看病するやさしい子である。

おにたは、人間に自分のような気のいいおにもいることをわかってもらいたい。わかってもらえるのではないかという期待感から、母親思いのやさしい女の子の前に姿を現し、積極的にかかわっていく。人間に会わないように用心深く暮らしていたはずなのだが。しかし、とうとうわかってもらえず、最後は麦わらぼうしと黒い豆を残して消えてしまう悲しいお話である。

2 文章構造 表1・2

おにたの人柄を叙述から見つけるという観点でまとめてみる。

場面	おにたの人柄と行動の様子	人柄の根拠となる叙述	おにたの心情	おにたの人柄と行動の様子	おにたの心情	人柄の根拠となる叙述	おにたの心情
3 母親を看病する女の子のためにとび出す	観察力がある 人のために動く人を見抜く力がある 勇気がある	おにたは、なぜか、せなかがむずむずするようで、じつとしていられなくなりました。それで、こっそりはりをつたって、台所に行ってみました。 (ははあんー) 台所は、かんからかんにかわいていきます。 (あちび、何も食べちゃいないんだな) おにたは、もうむちゅうで、台所のやぶれた所から寒い外へとびだしていきました。	お母さんに心配をかけないようにと話をする女の子の様子を見て、本当にご飯を食べたのかと確かめたい。 (やつぱり、ごはん食べてないんだなあ) 女の子のために、いてもたってもいられなくなつた。	おにたの人柄と行動の様子	おにたの心情	人柄の根拠となる叙述	おにたの心情
4 女の子の前に現われるおにた	勇気がある 人のために一生懸命 誠実(気のいい)	入り口をトントンとたたいた音がします。雪まみれの麦わらぼうしを深くかぶった男の子が立っていました。そして、ふきんをかけたおぼんのようなものをさし出したのです。 「せつ分だから、ごちそうがあまったんだ。」おにたはいっしょうけんめい、さつき女の子が言ったとおりに言いました。	今まで、人に見つからないように用心深くかくれていたが、女の子の前に姿を現し、ごちそうを手渡しする。 女の子が言ったとおりにして、女の子の作り話を本当のことにしている。 うれしそうな顔を見てほっとしているだろう。	女の子の心情と行動の様子	女の子の心情	人柄の根拠となる叙述	おにたの心情
5 「豆まきをしたいという女の子の思いをかなえて消える	どこまでも人のためにつくす	「どうしたの。」おにたが心配になって聞くと・・・ 「なんだって。」 おにたはとびあがりました。 おにたは、手をだらんと下げて、ふるふるっと、悲しそうに身ふるいして言いました。 水がとけたように、急におにたがいなくなりました。あとには麦わらぼうしだけが、ぼつんと残っています。 「まあ、黒い豆！まだあったかい……。」	はしを持ったまま考え込んでいるのはなぜだろう。 「えー。この子も豆まきがしたいの？」 このやさしい女の子も、おには悪いと思っっているんだ。人間はわかってくれないんだ。 「おにだって、いろいろあるのに。おにだって……。」絶望 最後まで、女の子のために豆を残して消える。	女の子の心情と行動の様子	女の子の心情	人柄の根拠となる叙述	おにたの心情
6 女の子が豆まきをする							

<p>場面</p>	<p>おにたの人柄と行動の様子</p>	<p>人柄の根拠となる叙述</p>	<p>おにたの心情</p>	<p>女の子の心情と行動の様子</p>
<p>1 節分の夜、まこと君の家から出ていく</p>	<p>気のいいおにはずかしがりや 用心深い</p>	<p>せつ分の夜のことです。…物語の枠組みの設定 去年の春から、小さな黒おにの子どもが住んでいました。 おにたは気のいいおにでした。 ・きのうも、まこと君に、なくしたビー玉をこっそり拾ってきてやりました。 ・この前は、にわか雨のとき、ほし物を、茶の間に投げこんでおきました。 ・お父さんのくつをびかびかに光らせておいたこともあります。 でも、だれも、おにたがしたとは気がつきません。はずかしがりやおにたは、見えないようにとても用心していたからです。 そして、古い麦わらぼうしをかぶりました。角かくしのぼうしです。こうして、カサツとも音を立てないで、おにたは、物おき小屋を出ていきました。</p>	<p>・豆をまいておにを追い払う節分は、主人公のおにたにとっては、一年で最も嫌な日である。 人間っておかしいな。おには悪いって、決めているんだから。おににもいろいろあるのにな。</p>	<p>女の子が出てきました。その子は、でこぼこしたせんめんきの中に雪をすくって人れました。それから、赤くなった小さな指を口に当てて、はあっと白い息をふきかけています。</p>
<p>2 いい家 を見つけて入り、はりの上に隠れる</p>	<p>豆のにおいに敏感 すばやい 身が軽い 注意深い</p>	<p>おにたのひくい鼻がうごめきました。 どこから入ろうかときよろきよろしている、入り口のドアが開きました。 おにたは、すばやく、家の横にかくれました。 (今のうちだ。)と思ったおにたは、ドアから、そろうちの中に入りました。 そして、天じょうのはりの上に、ねずみのようにかくれました。</p>	<p>・節分なので、どのうちもひいらぎが飾ってあるし、豆のにおいもするので、なかなかいい家がみつからないなあ。 ・いい家が見つかった。 (こりゃあ、豆のにおいがしないぞ。しめた。ひいらぎもかざっていないい。)</p>	<p>女の子が出てきました。その子は、でこぼこしたせんめんきの中に雪をすくって人れました。それから、赤くなった小さな指を口に当てて、はあっと白い息をふきかけています。</p>

IV 実践の実際 2018年2月

1 公開研究会2018年2月23日 第3学年学習指導案（第80回教育実践指導研究会要項より）

「ことばの奥まで読んでみよう」～「おにたのぼうし」～

(1) 単元目標

単元	叙述に即して登場人物の心情を読みとりながら、人柄や情景を想像しながら読む。
目標	主人公の人柄を表す叙述を丁寧に読む。

物語の世界に素直に入り込み、登場人物に寄り添って読もうとする子どもたちである。

これまでの物語文の学習では、登場人物の言葉や様子を表す文や言葉をもとに、気持ちの変化を中心に考えてきた。場面ごとに話の流れを追いつつ読みとっていくことが多かったが、2学期には、物語全体に目を向けるため、**場面で区切らずに、叙述をもとに登場人物の性格や人柄を考える学習**をしてきた。今回も「おにたってどんなおにだろう？」という問いを考える中で、その証拠の文やことばを見つけ出し、なぜそれが証拠となるのかを考えていく。同じ人柄を表すことばでも違う証拠のことばもあるだろうし、同じ証拠のことばでも違った人柄を考えることもあるだろう。また、その場面だけから証拠を見つけ出そうとする子もいれば、物語を横断的に読んで考えた意見も出てくることだろう。そうした視点の違いを拾い出し、ひとつひとつ確かめていく学び合いの中で、「あたらしい私」に更新されていくものと考えて今回の授業を組み立てた。

「おにたのぼうし」（あまんきみこ作）は、おにたの「やさしさと悲しさ」を軸にストーリーが展開される。心が通じ合わない切なさも心に残る。おにたがもつ女の子を思いやるやさしい思いやわかってもらえるという期待の気持ちは大きく、だからこそ結末のおにたの悲哀は深く、おにたに寄り添って読む子どもたちはどのように受け止めるのか。おにたの心情を読みとり人物像をとらえ、情景を想像しながら、節分の寒い雪の日の静かなこのお話の世界に浸りたい。

(2) 学習指導計画（全時間 6時間目/9時間）

第一次 語句の意味を確かめ、場面のイメージを共有する。

○節分のおにやお話の中のおにについて話し合い、おにのイメージを広げる。

①全文を読み、初発の感想をもち、学習のめあてを考える。 (1時間)

②語句の意味を調べ、文脈の中での意味をとらえながら読み、物語の流れを読みとる。 (3時間)

第二次 人物の性格を表すことばや表現を見つけ、人柄を考える。

①地の文や会話から人柄を表す言葉をみつけ、どんな人物かを考える。 (3時間) 本時

②心情を読み取り、気持ち表れるように工夫して音読する。 (1時間)

「今日のなるほど」を書き、学習を振り返る。 (1時間)

(3) 本時の学習について

①本時のねらい

おにたの心情にも触れながら、おにたはどんなおになのかを考える。

②予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
○前時に自分で考えた人柄と証拠のことばを確かめる。 ○叙述から、おにたの性格がよく表れていることばや文を挙げる。 ○今日のなるほどを書く。	・ノートに書かれたことを読み直す。 ・どの言葉に注目したかを明らかにする。 ・具体的な行動や会話に目を向ける。前時のふり返りと比べる。

□授業後の話し合いで話題にしたいこと

教師は、話し合いの中で学びが深まるように、子どものことばを拾い上げていたか。

2 学習の概略

◇おにのイメージを広げよう（0時と位置付ける）

- ・節分の行事や意味について知る。
- ・節分のおにはどんなおにだろう。
- ・物語に登場するおにはどんなおにがいるだろう。
- ・おに情報を集めよう。

(1) 全文を読み、ふしぎだと思ったことをファミリーで話し合おう。<みんなで考える問いをしぼる>（1時間）

☆おにたはなぜ消えたのだろう。

- ☆ぼうしの中の豆はおにたなのだろうか。
- ・おにたは「人間ておかしいな」と思っているのに、どうして人間にやさしくしたのだろう。
- ・赤ごはんはどうやって手に入れたのだろう。
- ・女の子はどんなくらしをしているのだろう。
- ・女の子はどうしておにたのことを神様だと思ったのだろう。

(2) ファミリーで話し合ったふしぎを考えよう。（1時間）

<ファミリーで出てきた問いについて、まずは自分で考える。根拠を挙げる>子どものノートから友達から出された様々な問いを考えることにより、場面で区切らずにお話全体を読むことにつながる。

○P206L7「こうして、カサツとも音を立てないで、おにたは物おき小屋を出ていきました。」どうして？

自分の考え

見られないようにとても用心していたと書いてあったから、しんちょうに下りたのだと思う。

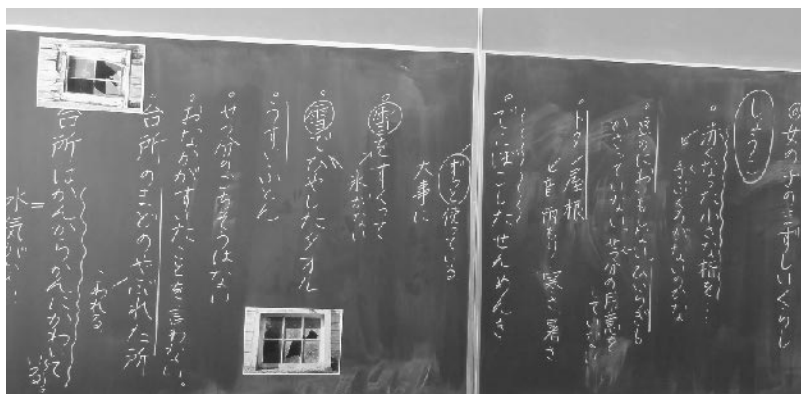
○P214L5「まあ！黒い豆、まだあったかい。」→なぜ、麦わらぼうしから出てきたのか。

自分の考え

おにたかもしれないけど、女の子が食べるかなあって、おにたが用意したのだと思う。

(3) 女の子のまずしいくらしのしょうこを見つけよう。<物語の設定を押さえる>（1時間）

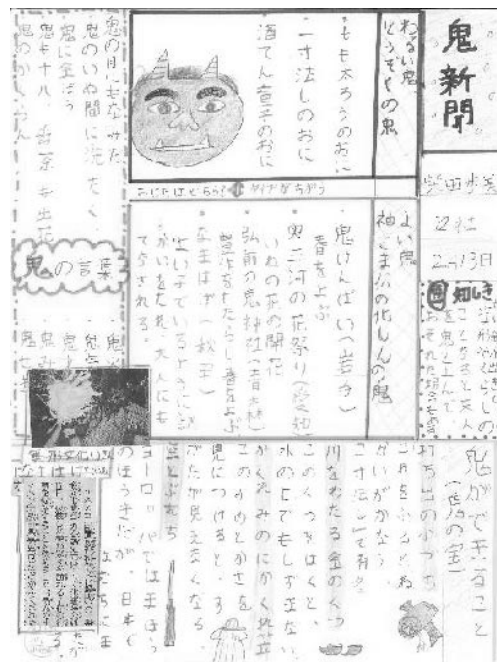
～女の子の行動や女の子の話したことばから～ →おにたの、女の子への思いにつながる。



<しょうこのことば>

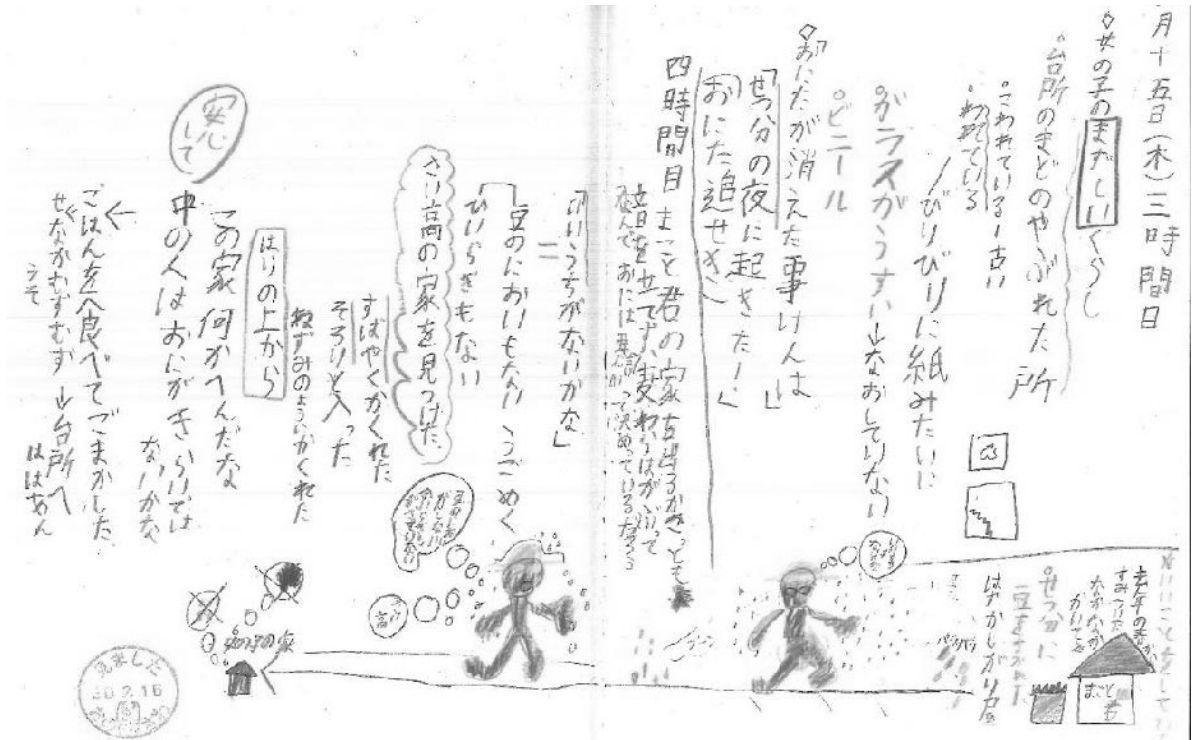
- ・トタン屋根の家
- ・でこぼこしたせんめんき
- ・うすいふとん
- ・新しい雪でひやしたタオル
- ・台所はかんからかん
- ・米つぶ一つない
- ・大根一切れない
- ・台所のまどのやぶれた所
- ・豆のおいがしない
- ・ひいらぎもかざっていない

*「最後の2つは、貧しいことの証拠とは言えない。お母さんが病気だから用意できなかったとも考えられる。」と子どもたちは考えた。



自分で調べたおに情報を新聞にまとめたもの

- (4) 場面を越えて、おにたの行動を追う<行動を追いながら、おにたの気持ちを考える> (1時間)
 [おにた消えた事けんは節分の夜に起きた!] 子どものノートから

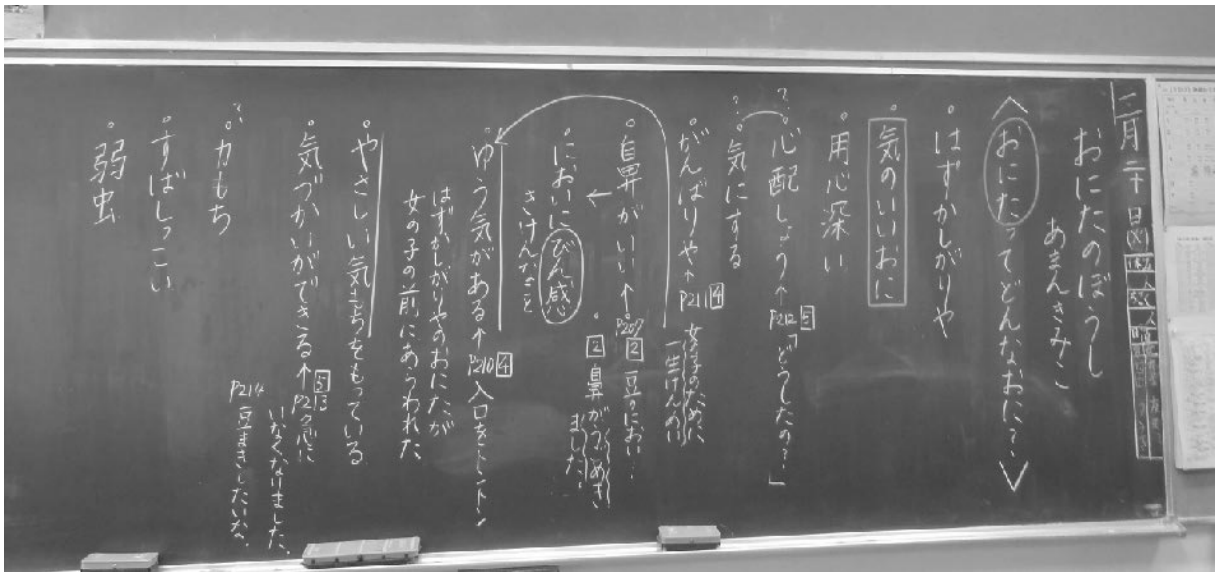


- 物語の設定を確かめる。 ○行動を追いながら、おにたの気持ちを考えていく。
- ・去年の春から…去年の節分でどこかの家から追い出され、まことくんの家に住みついた。
 - ・まことくんの家の人の役に立つことをしている。…ところが、節分の夜、豆をまかれて、追いだされてしまった。…「人間っておかしいな。おには悪いって決めているんだから。…」
 - ・「いいうちがないかなあ」…豆のにおいもしない、ひいらぎもかざっていないトタン屋根の家がみつかって、こっそり入った。すると、その家には、病気のお母さんの看病をし、お母さんに心配をかけないように、ごはんを食べたとやっている心のやさしい女の子がいた。
 - ・もうむちゅうで、寒い外にとびだしていったおにた。
 - ・しばらくして、節分のごちそうを男の子のすがたになってとどけた。女の子はにこっとわらう。
 - ・女の子は豆まきの話をしだす。
 「あたしも、豆まき、したいなあ。」「なんだって?」おにたはとびあがりました。
 「おにが来れば、きっとお母さんの病気が悪くなるわ。」
- ☆おにたは手をだらんと下げて、ふるふるっと、悲しそうに身ぶるいして
 「おにだって、いろいろあるのに。おにだって……。」氷がとけたように、急におにたがいなくなりました。あとには、あの麦わら帽子だけが、ぽつんとのこっています。
 ⇒麦わらぼうしの中に黒い豆を残して、おにたは急に消えてしまう。

- (5) おにたってどんなおに?…公開研究会授業本時 (2時間/3時間)

- ①物語全体を通して一貫して流れている「気のいいおに」という人物設定を確かめる。
- ◇おにたは人の役に立つことをするおに
 [しょうこ] 1場面から←・まことくんのビー玉を拾ってくる。・にわか雨のとき、ほし物を投げこむ。・お父さんのくつをぴかぴかに光らせておく。
 - ◇「気のいい」の意味を、おにたの行動から考える。
 - ・人が気づかないうちにいいことをする。・人がよろこぶことをする。
 - ・せいかくがいい。すなお。・・・気持ちがいい、悪いの「いい」ではない。

◇自分で読み取ったおにたの人柄を、みんなで共有する。



② 1場面以外から読み取れるおにたの人柄を考える。(行動を証拠にする)・・・本時

- (6) 「おにたは麦わらぼうしの中に黒豆を残してなぜ消えたのだろうか。」 <みんなの問いを話し合う>
 ・おにたは黒豆になったのだろうか。黒豆を置いてどこかに行ったのだろうか。 (2時間)
 ・おにたはどんな気持ちで消えたのだろうか。

- (7) おにたの気持ちの移り変わりを思い浮かべながら音読をする。学習のまとめをする。(1時間)

3 指導計画、指導案をふり返る

- (1) 物語の流れを読みとる時間が足りなかった。(指導計画に甘さがある)

おにたの人柄をまとめながら、心情にも迫ろうと考えたが、子どもは「おにたはなぜ消えたのか」という自分たちでつくった大きな「問い」をもって読んでいたので、出来事と心情を合わせて読みたいと思っている。⇒出来事をまとめる時に、もう少しおにたの心情を丁寧に読みとる必要があった。

- (2) そもそも「おにたは気のいいおに」と書かれている。お話全体に「気のいいおに」が貫かれているのに、「おにたはどんなおに？」という問いかけそのものがおかしかったのではない。

⇒「気のいい」おにだからこそしているおにたの行動を、1場面以外からも読みとればよかったのではない。

- (3) 「人間っておかしいな。おには悪いって決めているんだから。おににもいろいろあるのにな。」

おにたは、はずかしがりやであるし、おににもいろいろあることを人間はわかってくれないと思っているから、人間に姿を見られないように用心深く暮らしている。これが前提。だから、おにたの人柄を考えるのに、「やさしい」とか「がんばりや」とか「勇気がある」や、まして「豆のにおいをわかるから、鼻がいい」と子どもから出させたことはどうだったのか。それが、深い読みにつながるのか。⇒この物語は、おにたの人柄を考えさせるよりも、書かれている人柄や行動から心情に迫る読みが子どもに寄り添った読みだったのではない。

- (4) 「おににもいろいろあるのにな」というおにたの言葉はどういうことなんだろう。

これを子どもたちと考えていくことで、自分たちも鬼を悪いものとしてとらえていることに気づき、心から、「おににもいろいろあるんだな。決めつけてはだめだな」と思っただろう。

⇒0時として、「おにといえばどんなイメージ？」という、おにについての情報を出して共有する時間をとったが、読み取りを終えた後、おにについてみんなで話し合うことの方が深い読みにつながる。

V 授業のつまずきを探る

1 本時の授業をふり返る（問題とと思っている場面を切り取って）

<p>T：今日は，3，4の場面から，おにたの性格を考えていきましょう</p>	<p>～音読の後～ C1：「気のいいおに」の中にも，「がんばりや」の証拠がある…。 C2：がんばりやだと思う。P215L9の女の子が，おにたを神様だと思うところから，おにたががんばったとわかる。 C3：P210L13「雪まみれの麦わらぼうし」から女の子のためにがんばったとわかる。 C4：雪まみれになるまでがんばって，女の子のためにごはんをもってきた。</p>
<p>T：何ページのどこのこと？</p>	<p>C5：「雪まみれの麦わらぼうし」は時間をかけてごはんをさがしたということ。P211L4「おにたはいっしょうけんめい，女の子の言った通りに言いました。」で，はずかしがりやなのに女の子のためにごちそうを届けた。</p>
<p>T：勇気に関連して何かある？</p>	<p>C4：はずかしがりやなのにごちそうをもってきたから勇気がある。 C6：P211L1で「ふきんをかけたおぼんのようなものをさしだした」が証拠で，はずかしがりやで人間に会わないようにこっそりやっていたけど，女の子のために初めて人間に会って，勇気をもってさしだした。</p>
<p>T：今までどうだったの？ T：ほかに「こっそり」のしょうこは？</p>	<p>C6：はずかしがりやで用心深い。天井のはりの上ですごしていた。 C7：P206L1~2にかけて，はずかしがりやのおにたは見えないようにこっそり行動した。人間にばれたら追い出されちゃうから，人に見えないようにこっそり。</p>
<p>T：ほかに「こっそり」は？</p>	<p>C8：P208L1「そろりと家の中に入った。」だれにも気づかれないように，音を立てないようにしている。 C9：P206L7「カサッとも音を立てないで」から，音を立てると，まこと君に気づかれちゃうから。</p>
<p>T：1の場面にも「こっそり」の行動が出ているね</p>	<p>S：P210L2「それで，こっそりはりをつたって，台所に行ってみました。」で，<u>女の子にばれると追い出される。だから，台所にこっそり行った。</u></p>
<p>T：女の子にばれちゃうからこっそり行ったの？この場面でこっそりはどんな理由？</p>	<p>C10：女の子はおにたをまだ知らない。P208で「そろりと中に入りました」だから，ばれると，「なんでいるの？」っていうことになっちゃう。</p>
<p>T：なぜ，おにたは台所に行ったのかなあ。台所に行ったとき，<u>はずかしがりやだからこっそり行ったの？</u></p>	<p>C11：<u>はずかしがりやだから。知らない家だから台所に人がいるかもしれない。</u>用心深い性格だから。 C：・・・</p>
<p>T：もう一度P209の3の場面。どういう場面？何をおにたは見ているの？</p>	<p>C11：お母さんに，ごはんを食べた<u>うそをついているところ</u></p>
<p>T：<u>うそをついているのを見て</u>，この「こっそり」は，女の子にばれないように？</p>	<p>C12：P210L1このこっそりは女の子にばれないようにではなくて<u>女の子のうそを調べに行ったときのこと。</u></p>
<p>T：そこを読みましょう。</p>	<p>P210L1～9までをみんな德音読 後略</p>

2 問題点を探る

(1) 正解（授業者の読み）を求め、どこまでも子どもを追いつめている。

ラウンドテーブルの時に指摘されたように、「こっそり」という行動の奥にある心情の読み取りに子どもとのずれがあったが、そのずれを子どもを説き伏せて解決しようとしている。

◇3場面、女の子がごはんを食べたとお母さんに答え、お母さんがまたとろとろねむってしまった後

女の子がふうっと長いため息をついたのを見て、おにたは、なぜか、せなかがむずむずするようで、じっとしていられなくなりました。それで、こっそりはりをつたって、台所に行ってみました。

・子どもの読み・・・はずかしがりやだから、人に会ってしまったら困るから「こっそり」行動する。
 ・授業者のこだわり・・・1, 2場面での「こっそり」の行動と、3場面での「こっそり」は意味が違うでしょ！と必死になっている。1, 2場面では、人に見つかると思われ追いつかれるから、はずかしがりやという性格もあって、「こっそり」行動している。3場面の台所に行くときの「こっそり」は、単にはずかしがりやという性格からではなく、女の子が本当にごはんを食べたのかを確かめたくて、いてもたってもいられなくなって「こっそり」行動している。人に見つかると思われ追いつかれてしまうからではなく、確かめるまでは人に会いたくない、とにかく確かめたいという気持ちだと授業者はとらえている。

⇒叙述に戻って考える⇒「それで」は因果関係を表す言葉であることをきちんと押さえる。

☆子どもは、「こっそり」という言葉だけを読んで、「はずかしがりや」の根拠として挙げているが、同じ「こっそり」という言葉でも、1, 2場面で使われている「こっそり」と3場面に出てくる「こっそり」は、ことばの奥の意味が違う。「ことばの奥まで読んでみよう」という単元目標であるにもかかわらず、目標に近づくための手立てがきちんと考えられていなかった。また、授業者が、人柄と言いながらどうということばを拾いあげたかったのかがあいまいである。性格を表す言葉なのか、行動に現われている様子という言葉なのか、ここでも授業者と子どもとのずれが見える。これが授業者がつまづいた原因ではないかと考える。

(2) 本時の授業の綿密な計画ができていなかったため、授業の流れを変える勇気がもてなかった。

☆この場面の「こっそり」の行動の奥には、おにたのいても立ってもいられない気持ちがあり、それは叙述から読み取ればいいという流れにできなかったのは、「それで」を読み飛ばした授業者の教材研究不足である。躊躇せずに3場面の初めからみんなで音読し、「おにたは、なぜか、・・・」の文を視写させて、「それで」の働きを確かめる展開にしていれば、子どものことばを拾い、みんなでことばに立ち向かっていくことができたのではないか。授業者の読み取りが甘く、それによる自信のなさが授業の場で表面に出て、授業者が無理やり引っ張る授業になっていったと考える。幅広く子どもの読みを想定しておかないといけない。授業中に流れを瞬時に修正する判断力と勇気が必要である。

☆併せて、公開研究会での授業は、無難にではなく挑む授業をしたい。子どもたちが最初にもった大きな問い「おにたはどうして消えたんだろう」「豆になったのか、豆を置いて消えたのか」「あんなにきらいな豆なのに、なぜ豆になったのか」「人間ておかしいな、とっているのに、人間にいいことをするのはなぜなんだろう」という問いに迫っていく授業展開にできなかったことが、後悔の大きな原因である。

VI 再設計

公開研究会の授業のふり返りから洗い出された問題点を踏まえ、授業デザインを再考する。子どもの思考に寄り添うことばの学習を考え、次の実践に生かしたい。

1 子どものことばを学習材にする

子どもたちが、自力でまとめたおにたの人柄を丁寧に読み取り、それを学習材として、なぜそう考えるのか、証拠の言葉はどれなのかをみんなで確かめる⇒子どものことばで軌道修正していく。

① K児：しょうこは、P206L1：はずかしがりや L2：用心深い、P210、P205：やさしい、勇気がある
 ⇒この証拠をみると、少しおかしいところがあります。それは、はずかしがりやなのに、勇気があるということです。私は、本当は、おにたが気強いおにただと思います。

…女の子の前にごちそうをもって現れるということ、勇気のある行動ととらえている。はずかしがりやなのに、勇気がある、というのはおかしい。だから、本当は気強いおにただと考えている。

⇒おにたが女の子のことを思って、止むに止まれぬ気持ちの表れだととらえさせたいが。

② N児：親切→しょうこ…P210L8～9「おにたはもうむちゅうでとび出していきました」

⇒女の子のためにとびだしたことを、「親切」ととらえている。「もうむちゅうで」を読みとらせたい。

しんちょう：P208L1「…そう思ったおにたは、ドアからそろりとうちの中に入りました。」

⇒用心深いにつながる。「そろり」と「こっそり」とどう違うのか。⇒慎重さを表すことばを集めてもよいのではないか。

③ M児：用心深い→1. 見えないようにとても用心していたからです。2. そして、古い麦わらぼうしをかぶりしました。角かくしのぼうしです。

⇒おにであるしょうこの角を人間に見せてはいけない。ぼうしの意味を考えることもできる。

2 授業後の「ふり返り」をもとに次の授業を設計する（指導計画を修正する）

☆子どもの記述「今日のなるほど」（授業のふり返り）を丁寧に読み取り、子どもの読み取りに寄り添って問いを考える。（前時の授業のふり返りから）⇒問題作りの学習は子どもから出た問いをみんなでき、話し合う。子どもの思考に寄り添った学習だと言える。

① R児：おにたは人間をおかしいと思っているなら、そこまで人間にやさしくしなくてもいいと思います。どうしてそんなに人間の手伝いをするのか、ふしぎになりました。

② T児：ぼくは「人間ておかしいな」のところがおかしいなと思った。ぼくは、おにはこわくないと思っている。

③ K児：ぼくは、おにも人間もどちらもしょうがないと思います。それはなぜかという、おには悪いことをしているから、人間にかんちがいされているし、人間はおにを悪いと決めている。

④ S児：…おにたはおになのにせいかくがいいということがわかりました。

⑤ Y児：おにたは気のいいことをしているのに、はずかしがりやだから自分がやったとわかってもらえなくて、なんかかわいそうに見えます。

⑥ E児：今日みんなの意見を聞いて、気のいいとは、人の役に立つ、人のためにいいことをするということだと思いました。⇒ことばを定義する

⑦ R児：「見えないように」は、ぼくは用心深いだと思っていたけど、はずかしがりやからつながっていたのが、なるほどでした。

⑧ N児：…節分の日には、人間ておかしいなと思う気持ちに、やっぱりなと思いました。

⑨ A児：はずかしがりやと用心深いは、にているようで、意味がちがうと思いました。用心深いは、おにとして人に見られないように行動するの意味だと思いました。

⑩ U児：おにたは外に行くとき、ぼうしをいちいちとったのではなく、女の子の家ではずっとかぶっていた。心がすんでいるおにた。⇒ぼうしの意味を考える展開もあつたのではないか。

⑪ M児：わたしは、気のいいおにとは人がよるこぶようにする＝せいかくがよいだと思います。ぼくがやったんだよといばらないところがえらいところだと思いました。⇒「気のいい」の定義

⑫ S i 児：1の場面で直せつおにたのせいかくをいっているのが多かったのは、1ではおにたのじこしょうかいをしているからだと思いました。

⇒S i 児は場面全体を引いて見ている。場面ごとに途切れないように、物語全体を意識して読ませたいという授業者の思いから、おにたの人柄を考える授業に組み立てたが、1場面のおにたの紹介が、この物語全体を貫く人物設定であることに気づいている。S i 児のこの記述を取り上げて、それを確かめていくような授業を組むことができれば、子どもが主体的にこの物語を読み、教材と立ち向かうことにもなったのではないかと思う。

子どものことばから多くのことを学び取ることができる。授業者の読みは、押し付けになると「教師の読み（正解）にひっぱる」授業になる。子どものことばの奥にある子どもの思いを丁寧に読み解いて、授業を設計し、次時の授業をつくっていくことが大事であることを改めて思い知らされた。

Ⅶ む す び

「ともにつくることばの学習」にするために

教材研究は十分すぎるほどにしなければならないのはだれもが承知している。教師も自分の「読み」が必要だ。しかし、その「読み」は、正解として子どもに求めるものではなく、教えるためのものではなく、一読者として、一人の人間として、子どもとともに教材に立ち向かって読むときの材料でなくてはならないのだと思う。その「読み」は、子どもが読み取りに苦戦しているときには手助けの材料として、子どもがあやふやな読みをしている時には正確に読むための材料として、そして、子どもの読みが浅い時には、子どもと本文に立ち向かって読むときの武器として必要になる。「ともにつくることばの学習」は、子どもの読み取りの実態を把握した上で、授業のその中で、子どものことばを敏感にキャッチし、子どもとことばのやり取りを通して、教師も一学習者として学びをつくっていくことだと考える。

授業中のやりとりの中で、「どうしてそんな風に考えたのかな。」と子どもに返すゆとりをもてないといけないのだろう。日々成長する子どもとの授業は、毎日が戦いである。授業中の切羽詰まったやりとりの中で、大切なのは「聴くこと」なのだろう。子どものことばをちゃんと聴いてきたのだろうか。公開研究会の授業の後悔をもとに、日々の授業の自分の姿を見つめ直した。子どものことばをしっかりと「聴いて」、きちんと向き合い、どのことばを拾い上げるかを瞬時に判断することのできる教師の力量を磨くことをさらなる課題としたい。「ともにつくることばの学習」の中で、豊かで確かなことばの力を育てることができているのか、これからも問い続けていきたい。

<参考・引用文献>

- 澤本和子・授業リフレクション研究会編 2016「国語科授業研究の展開 ―教師と子どもの協同的授業リフレクションの研究―」東洋館出版社
- 阿部藤子 2013「『読む』ために『書く』ことの有効性に関する授業リフレクション～『注文の多い料理店』の実践を通して～」研究紀要 第20集
- 石田佐久馬 1986「国語科問題作り学習のすすめ」東洋館出版社
- 石田佐久馬 1986「国語科問題作り学習の実践」東洋館出版社
- 石田佐久馬 1989「国語授業をゆさぶる」東洋館出版社
- 大村はま 1973「教えるということ」共文社
- 澤本和子監修国語教育実践理論研究会 2011「新提案 教材再研究 循環し発展する教材研究～子どもの読み・子どもの学びから始めよう」
- フィリップ・キャム 2015「共に考える」
- 佐伯 胖 1975「『学び』の構造」

感謝をこめて

本稿は昨年度の公開研究会での授業の失敗についてふり返ったものです。失敗に向き合うという、とても辛いことを後押ししてもらったのは、今年度の課題別部会「てつがくする教師部会」での話し合いでした。夏の研究会でラウンドテーブルの提案者として話す内容についての話し合いの時、部のメンバーが、話し手に寄り添い、自分のことのようにじっと聴いてくれたことで、本音を出すことができました。何でも語れる安心の場の雰囲気の中で、封印したかった自分の後悔の気持ちのとびらを開き、自分の失敗に向き合うことができました。まずは、「てつがくする教師部会」の先生方に感謝申し上げます。さらに、ラウンドテーブルの場でも、そのグループのメンバーにじっくり話を聴いていただき、様々な視点からご質問やご意見、ご指摘をいただきました。「教えたいことがあって教えよう（教え込もう）」と

していた・・・」そんなことはしてこなかったはずなのに・・・。自分の中の「当たり前」を見直すきっかけになりました。「授業の失敗は自分自身の授業に対する思い上がりにあった」と気づかされました。つまり「自分の授業をてつがくする」ことになったのです。それは、公開研究会の授業をふり返ることで、自分の日々の授業を見つめ直し、さらには国語部でずっとテーマにしてきた「ともにつくることばの学習」を捉え直すことになりました。この4年間の「てつがくすること」の研究を通して、「見つめ直す」「考え直す」ことが身近なものになってきたのだと思います。ご指導いただいた先生方、校長先生、副校長先生、ともに研究を続けてきた同僚の先生方お一人お一人に心より感謝申し上げます。

これまで、お茶小国語部（ことば部）の先生方には、さまざまなご指導、ご助言をいただきました。今も国語部の中で、国語の授業のあり方を常に学ばせていただいています。心より感謝いたします。特に、教師としての第一歩を踏み出させていただいた本校での教育実習の指導教官である松木正子先生には、石田佐久馬先生が代表であった「日本国語教師の会、櫛の会」にも導いていただき、そこでは本校元副校長である若林富男先生、長年東京都で教師を続けられた安田恭子先生からも多くのご指導をいただきました。櫛の会では日々の国語の実践について協議され、教師が授業にどう向き合っていくかを学ばせていただきました。今回も、本稿にまとめる前に櫛の会で発表し、実際の授業の問題点や教材研究の視点、授業をつくる教師のあり方など、ご指導をいただきました。櫛の会の先生方は公開研究会の授業を参観してくださった方も多く、授業展開について深いご意見をいただきました。櫛の会の先生方にも心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、「授業リフレクション研究会」の勉強会で、澤本和子先生、阿部藤子先生にはリフレクションの手法による授業分析についてご指導をいただいています。本稿の授業リフレクションも、その会での学びがもとになっています。また、当日の授業を参観していただいた澤本先生からは、授業改善の貴重なご示唆をいただきました。お二人の先生に心より感謝を申し上げたいと思います。